

地域住民が観光客の足になる マイカー運送事業 ——モビリティ革命、養父の挑戦

関宮地域・大屋地域内の移動は「やぶくる」におまかせ！
国家戦略特区としてさまざまな規制改革に取り組む兵庫県養父市が、
2018年5月、新たな自家用有償観光旅客等運送事業をスタートさせた。
運送の対象を地域住民から観光客に広げた全国初の試みだ。
その意義や概要を養父市国家戦略特区・地方創生課課長の谷 徳充さんに聞いた。

別宮の棚田 ©岡山茂樹/PPS通信社

国家戦略特区の優等生

兵庫県北部、但馬地域の中央に位置する養父市は、2004年いわゆる平成の大合併により八鹿、養父、大屋、関宮の4町が合併して誕生した人口約2万4000人（18年4月末時点）の市。自然豊かな市内には、兵庫県最高峰の「氷ノ山」、スキー・スノーボード・パラグライダー・登山やハイキングなど年間を通じたアウトドアスポーツのメッカ「ハチ高原」、日本の原風景とも言える「別宮の棚田」、日本遺産に認定された「明延鉱山」など、見どころ・遊びどころが多く、年間100万人以上の観光客が訪れる。

実は養父市は14年3月、国家戦略特区・中山間農業改革特区に指定。高齢化や離農による担い手不足に悩む中山間地農業の改革拠点として地方創生のモデルとなるべ



左から、鉢伏山の中腹に広がる「ハチ高原」、落差98mの名瀑「天滝」、蛍が乱舞する「奥米地」、国の重要文化財「名草神社」

く、耕作放棄地の再生、農業生産法人の要件緩和、6次産業化の推進、空き家再生など、多様な規制改革を推進しており、「国家戦略特区の優等生」とも評されている。

全国初、特例第1号として

そんな養父市で5月26日スタートしたのが、マイカーによる新たな自家用有償観光旅客等運送事業「やぶくる」だ。過疎地域の公共交通代替輸送や福祉輸送に限って認められている現行の自家用有償旅客運送を拡充したもので、国家戦略特区制度に基づく「道路運送法の特例」活用第1号として、地域住民だけでなく観光客も運送できるようになった。

事業の実施主体は、タクシー事業者、バス事業者、観光関連団体、市民、行政が一体となって設立した「NPO法人 養父市マイカー運送ネットワーク」。ハチ高

原などを擁する関宮地域と、明延鉱山などが位置する大屋地域の2エリアで、各エリア内の移動に限り運行される。運賃は2kmまで600円、以後は750mごとに100円加算。タクシー料金の56%〜73%程度と、割安になる。

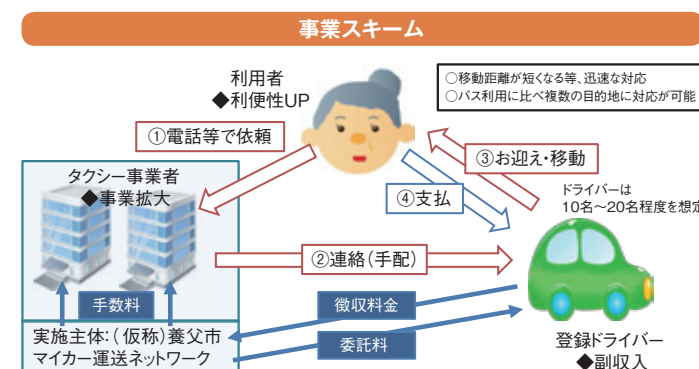


5月26日、「やぶくる」の発進式



安全確保へ、プロのノウハウを生かす

この事業が画期的なのは、観光客を対象にしたことだけではない。「タクシー会社が事業の実施主体として参画するの初めて。緑ナンバーが白ナンバー事業に参入する全国初の試み」と谷さんは言う。養父市内には3つのタクシー会社があり、いずれも拠点はJR沿線の八鹿地域及び養父地域だが、観光資源が多く点在しているのは



関宮・大屋地域。とはいえ、30分以上離れた関宮・大屋地域まで行ってワンメーターだったりすると採算が合わず、カバーできていなかった。そこで両地域の地域内運送は「やぶくる」、エリアをまたぐ場合はタクシーと、実情に合った棲み分けを図ることにした。「事業者の支援を取り付けるなんて、『針の穴を通すようなくみをつくり上げた』と評価してくださる方もいます」

こうして「やぶくる」には、市内のタクシー事業者が3社揃って参画し、電話受付・配車手配などの運行管理を担うことになった。またドライバー向けの講習、法定点検、運行前確認といった安全対策にもプロのノウハウが生かされている。

登録ドライバーへの仕事依頼にはスマホを活用。アルコールチェックなどの運行前確認にもスマホを使う。「タクシー会社の提案でテレビ電話を活用し、ドライバーの様子を確認することで、万全を期している」

16人のドライバー、参上

5月のスタート時点で、登録ドライバーは女性2人を含む16人。



女性ドライバーも活躍

年代は30代～70代と幅広い。農家や自営業の人もあるが、最多は無職の高齢者。リタイア後の第2の人生、地域のために何かしたいと手を挙げた人も多いという。

上／日本遺産に認定された「明延鉱山」。かつて日本一の錫鉱山として栄えた下／当時一円で利用できた「一元電車」



利用料金は、NPO法人が運営費、タクシー事業者が手数料として受け取り、残りを報酬としてドライバーに支払われる。とはいえドライバーは、車検や保険はもとより、ガソリン代も自己負担。1日あたり売上目標も初年度6000円、2年目1万円。事業規模は決して大きいとは言えない。「ドライバーさんだけでなく、タクシー会社もほとんど手弁当。ウィンウィンというより、みんなが少しずつ負担して成立させたというほうが実情に近い」

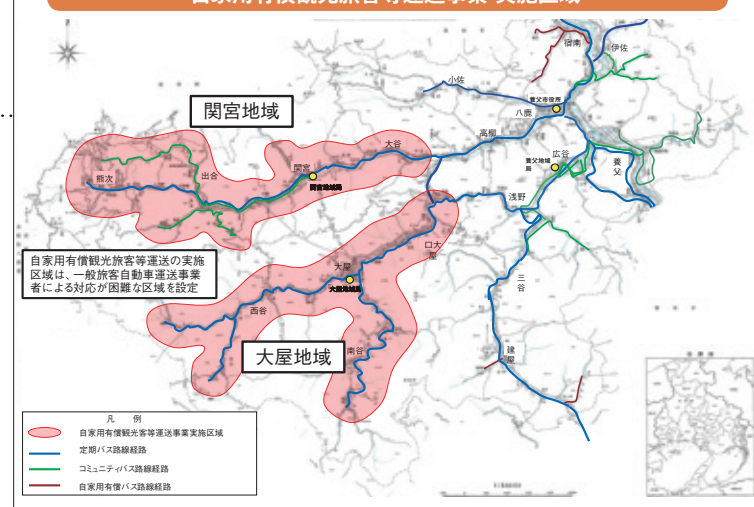
「ちよい乗り」ニーズに応える

皆が負担し合っても新事業を起こす。その背景には、過疎地域特有の事情がある。もともとこの辺りでは1人1台のマイカーが当たり前。お金を払ってタクシーに乗りという文化はなく、隣のおばあちゃんを乗せて買い物や病院へ行くのが日常風景だ。

「しかし人口減少・高齢化のなかでは乗せる人も高齢化し、地域の生活が成り立たなくなる。10年後20年後を見据えて今、手を打たないと」と、危機感を露わにする。

実際、人口は合併後の14年間で約6000人も減少。地域活性化のためには外から人を集めることが重要になる。観光で訪れ、養父のフ

自家用有償観光旅客等運送事業 実施区域



ンになって移住してくれるのが何より。だから観光客に対しては、観光協会と連携し、高原や滝といった大自然や文化財・産業遺産など、地域内で観光スポットをめぐるメニューを提供。多様な観光スポット間の「ちよい乗りニーズ」に応えたい、という。

マイカー文化からタクシー文化へ、地域のモビリティ革命への期待を寄せ、「やぶくる」は走り始めた。 **躍**